

# 地域課題解決のための 継続的な探究活動を 生徒の進路実現につなげる

## ▶ 村上高校(新潟・県立)

取材・文／永井ミカ

探究学習「イヨボヤプラン」が本格的に始まったのは2017年。従来の総合的な学習の時間委員会をなくし新たにイヨボヤ委員会を立ち上げ、進路指導主事の伊藤先生をまとめ役として分掌や学年を超えた教員が集まった。

とはいっても、まったく新しいことを一から始めたわけではない。地域と連携した取り組みは従来も行っていた。イヨボヤプランでは各取り組みを見直し、必要に応じてリメイク。そして、意味やつながりを考え、3年間を通して効果的に実施していくということが意識されている。

例えば、1学年の企業訪問も以前から実施していた取り組みだ。地元企業を訪

### 個別の取り組みの意味や 取り組み間のつながりを意識

### 進路指導の課題とテーマ

新潟県立村上高校は創立120年を迎えようとする伝統校。地域からの信頼は篤く進学実績にも定評がある。しかし最近では学力の高い生徒が都市部に流出する傾向が強まり、例えば難関校受験にチャレンジするような生徒が減少しているそうだ。志の高い生徒、同校を第1希望とする生徒にもっと入学してもらい、学校を活性化させ、地域により貢献できるような存在になりたいという思いを抱えていた。

「生徒たちは真面目である反面、おとなしく消極的なところがあります。彼らに判断力や行動力を付けてもらいたい」と言うのは進路指導主事の伊藤 喬先生。また1学年の担任の田島甲太先生は「本校の生徒には答えが複数あるような問いは苦手という傾向があります。生徒たちがもっと思考するようになるためにはどうすれば良いか常に考えています」と言う。

さらに新学力観に基づく指導という課題も抱え、効果的なキャリア教育を実施したいと考えたとき、伝統校ならではの同窓リソースをもっと積極的に活用するべきではという考えに至った。外部の協力を得ながら地域の課題に取り組む探究活動を「イヨボヤ\*プラン」と名付け1学年から2学年にかけて継続して実施。この取り組みを3学年に、そして個々の進路実現へもつなげていくために、学校をあげて走り出している。

※イヨボヤとは村上名産の「鮭」のことを指す言葉

問しそこで学んだことを発表する。17年度の1年生も同様にグループごとに企業を訪問したが、最後のポスター発表を通してどの企業の課題も少子化・高齢化・地域活性化の3つに集約されることがわかってきた。そこで、その3つを地域が抱える課題の柱として、2学年の村高ゼミに引き継いだ。自由テーマで依頼していた大学の出前講義を3つの課題テーマに沿った講義に絞って依頼し、ゼミ形式で生徒が学び、その先の探究活動の足がかりにするという流れにしたのだ。

このように個々の取り組みを次の取り組みにつなげ、3年間の学習に有機的な流れを作る。「そのためには、見える化が大切」と伊藤先生。教員にも生徒にも協力者である外部の人たちにも、何のため、今これをやっているのかを明示していき、

全員がつながりを意識するということだ。見えるための具体的な手段のひとつが生徒が1冊ずつ持ち活動のすべてを記録する「イヨボヤノート」。自ら課題を設定し解決に向けて思考した軌跡を振り返り、自分自身と社会を結びつけ、おのの進路実現につなげていくためのツールだ。



左から  
進路指導部 木山美奈子先生  
校長 関矢和彦先生  
進路指導主事 伊藤 喬先生  
進路指導部 田島甲太先生

#### ◎進路状況(2018年3月実績)

大学進学107人、短大進学10人、  
専攻進学44人、就職7人、その他9人

大学進学者は毎年100名を超え、そのうち20名前後が国公立大学。ここ数年、数字は大きく変わっていない。難関校にチャレンジする志の高い生徒を増やし、進学実績を上げたい考え。

#### ◎School Data

1900年創立／普通科／生徒数521人(男子268人・女子253人)

ツール1 進路指導のねらい

ダウンロード可

平成30年度 進路指導のねらいと年間計画

ねらい	1学年	2学年	3学年	全体				
1 学習意欲・学力養成	主体的に学習に取り組む。知識・技能を確実に習得する。(学習意欲、課題達成、質問を普通に行う生徒) 読書の基礎力を養う。特に英語の基礎力を高める。	学習意欲の維持(進路科目自覚の促進)と読書の基礎力養成 読書力の養成(特に「数学」)、理科の基礎力養成	受験後の実践(進路で学習、探求している生徒) 読書力の養成(進路科目自覚、理科の早期完成、センター対策)	学習意欲・学力養成の確立 授業第一に、更に履修・スタディを徹底した学力養成 スタディノートによる読書の徹底(17年度)				
2 進路意識向上	学ぶこと、働くことの意義を知る。 様々なことを選択せよ。自分の興味関心・適性を知る。 大学入試や自分の関心に応じた学校について知る。	社会情勢を通して、大学で学ぶ意義を知る。 大学入試や自分の関心に応じた学校・学科について知る。 17年度の受験に向けた目標を明確にし、主体性を果たせる。志望理由書の作成	資格方法と大学・職について知る。 受験情報をもとに、入りたい学校を明確に目標とする。	社会や大学について知りながら、主体的に進路選択できる力の育成				
3 新学力観の育成	調べ方、書き方、話し合いの仕方、発表の仕方等を達成スキルを身につけることで、主体性を持って多様な人と協働して村上地域の課題解決に取り組むことができる。 [イヨボヤノートによる活動報告の蓄積と振り返り]	調べ方・書き方・話し合い、発表の仕方等を達成スキルを身につける。 地域課題の解決方法を仲間と考え、実行する。 探究学習を通して、思考力や問題解決力、創造力を養う。 [イヨボヤノートによる活動報告の蓄積と振り返り]	1、2年で身につけた能力を本番で活用する。	新学力観に向けた取り組み、ポートフォリオの作成 探究学習を通じた探究学習の振り返り 卒業生によるイヨボヤノートの発信				
学期	月	学校行事	進路行事	テーマ・留意点	進路行事	テーマ・留意点	進路行事	進路行事
	3	始業式・入学式 卒業式	スタディサポート①	中入学直前に実施 探究学習の進捗(実地・授業)の振り返り	進路の語	学年課題の開始と2年の成長計画立案 地域課題の解決方法を仲間と考える	進路の語 18年度	進路の語(全体) 進路希望調査
	3	始業式 離任式	スタディサポート②	4月入試に向けての準備	スタディサポート②	入試直前に実施 4月入試を想定した自主学習活動の実行	進路の語(各専修の組) 中期目標発表発表	進路の語(各専修の組) 中期目標発表発表

進路指導年間計画表にある「進路指導のねらい」。学習意欲・学力養成、進路意識向上の2本柱に、17年度より新学力観の育成という項目も加わった。新学力観の育成については、イヨボヤプランの活動とイヨボヤノートへの蓄積・振り返りが中心となる。

ツール2 イヨボヤプラン計画図

ダウンロード可

新潟県立村上高等学校 2017年度入学生 イヨボヤプラン

【目的】①村上の歴史や文化、資源について学び、探究する  
②郷土愛を育み、地域活性化の方策を考える  
③地域貢献できる人材を育成する  
④村上の魅力を国内外に発信する

【活動】①地域や社会が抱える課題の理解  
②進路を重層化した学習探究  
③探究プロセスの記録

学年	月	学年進路指導	探究学習(村高ゼミ)
1年	4	オリエンテーション大会	
	5	分野別ガイダンス(前期)	
	6		
	7	キャリア教育講演会(地元で働く人々や講師に話を聞く)	
	8	新学力観オープンキャンパス(仮参加)	模擬ポスター作成
	9	オープンキャンパスレポート作成	
	10		
	11	大学模範講義	
	12	ブックレポート作成①	専修別活動 6コースに分かれて訪問→組ごとにポスター作成→発表会、相互評価
	1		「働くことの意義」作文執筆 文章完成→相互評価→新聞投稿
	2		
	3	分野別野訪レポート作成 1年次活動報告書作成 ブックレポート作成②	村上フォーラム(活動報告会・表彰会)
2年	4	職科方法ガイダンス(前期講義)	「むらかみえはがき」作成 34組に分かれて訪問→えはがき作成(情報の日)→発表会、相互評価
	5	新学力観ガイダンス(前期講義)	
	6		
	7	村上市長との心むらかみトーク プレゼンテーション講座(前期講義)	「村高ゼミ」 「少子化」「高齢化」「地域活性化」で探究分野の希望調査、並行編成 「分野別模範講義」(7月)を受講→探究テーマ決定
	8	ブックレポート作成③	情報収集、調査の作成 スライド作成(情報の時間)
	9	上級学級オープンキャンパス(仮参加)	発表会、相互評価(11月)
	10	公開講座「むらかみえはがき」展示、人気投票	
	11	「日南の竹打籠祭り」ボランティア参加	
	12	大学模範講義	
	1	新学力観実践でのえはがきプレゼン ブックレポート作成④	志望理由書作成 ガイダンス→作成→相互評価
	2	模範講義会(前期講義)	
	3	2年次活動報告書作成	村上フォーラム(活動報告会：1、2年合同)

医療・福祉領域から看護師、金融・法律領域から司法書士など、各職業領域から8人の社会人を招き講演してもらい、地域社会の課題や働くことの意味について考える。グループごとに希望する

キャリア教育講演会(1年)

イヨボヤプランに関して大きな流れは委員会が作るが、各取り組みをどのように実践・工夫するかは、学年や担任の自由度が高い。本格スタートして2年目。今は各教員がいろいろなアイデアを試行錯誤している時期でもある。

大きな流れを委員会で作り  
学年や担任が工夫を凝らす

グループごとに地元企業を訪問し、そこから見える地域の課題を探り、ポスター制作の話を聴くが、事前に生徒各自がタビサブリで「仕事の広がり」に関する動画を視聴しワークシートを使って理解を深めたあとに領域を決めるのが特徴。講演を聴いた1週間後にクラス内でまとめを発表する。

企業訪問(1年)

イヨボヤプランの取り組みは、原則としてグループ学習(グループは都度変わる)で事前学習から発表までが一連の流れとなっている。他者と協働しながら課題解決に向け探究し、記録や発表で言語化する力を付けるのが狙い。

「流れ」「つながり」を意識した探究学習「イヨボヤプラン」の計画図。細い部分まで必ずしもこの通りに実践できたわけではないが、1年生から2年生にかけて、地域課題についてインプットし考え行動し書き発表するという流れは実践できた。現状では2年生の最後に行う志望理由書作成が3年生の時に活かされていないことが課題。

1学年から2学年にかけて長期休暇

ブックレポート(1・2年)

1学年での学びを通して、「働くことの意味」というテーマで4000字程度にまとめる。相互評価し選ばれたものを地元新聞に投稿。昨年度は5〜6人の文章が紙上で紹介された。そのことがきっかけで、次は自分も個人的にコンクールなどに挑戦する生徒も。

「働くことの意味」まとめ(1年)

8講座程度の模範講義。こちらからも従来取り組みの踏襲だが、今年度から1・2年生合同とし、2年生の生徒が司会進行などを務めることになった。2年生の成長ぶりを1年生に見せたいという狙いがある。

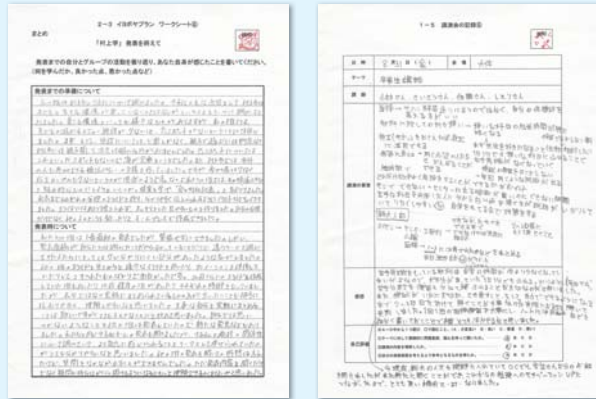
大学模範講義体験(1・2年)

「ポスター発表の際、企業の方から『自分たちにも事前に学習の意味・意図をしっかりと伝えてほしい』というご要望を頂きました。今後はさらなる見える化を、目指したい」と伊藤先生。協力したいという企業や業界も増えており、発表の場が地域と学校との関係づくりの場にもなりつつあるという。なお、来年度以降は生徒が企業にアポを取るところから始める考えだ。

ツール3 イヨボヤノート



1学年、2学年で1冊ずつ。文理選択なども含め、生徒が進路について考えたこと、学習したことは、各自ここに集約していく。各取り組みの事後学習として生徒が記入したあとは、担任が集めチェックして返す。「プリントのようになくすことがない。ポートフォリオとして後に見直すためには、ノートが最適です」と木山先生。



を利用して全4回の読書レポートを書く。1学年ではA「本に親しむ、読書に親しむコース」、B「自己の進路を考えるコース」のいずれかを選ぶように、2学年ではBコース限定とした。2学年では探究のテーマと関連する本を選んでよい。「自分の世界を広げ、進路を考える手がかりにしようというのが狙いです」と2学



「えはがきプロジェクト」の生徒の作品。



イヨボヤプランの学習はすべてグループ学習。クラスを解体したりクラス内だったりしながらさまざまなグループを作り活動する。「いろいろな人と協働して解決していく」ことを重要視している。



フィールドワークは現在2年生からのスタートだが、1年生に前倒したいという。「まず地域を実際に自分の目で見てから探究活動をするのがよいのでは?」というのが2年間実施してみたい課題だという。



発表はポスター発表やクラス内でのポイントを使った発表など、いろいろな形で行っている。村高ゼミの場合は、校内7会場で発表しながら相互評価し、評価の高かったものが3月の「村高フォーラム」での発表となる。

年担任の木山美奈子先生。木山先生のクラスでは視野を広げるきっかけにしてほしいと、誰がどんな本を読んだかわかるよう一覧にして教室に掲示している。

**「むらかみえはがき」プロジェクト(2年)**

例年、2年生の初めに地域を知るために地元の博物館を見学していた取り組みから発展させた企画。「村上の良いところを外に向けて発信する」という目的で、地元誌の記者に取材のノウハウを教えてもらったあと、地域の店などを取材しその魅力を絵葉書の形に制作する。相互評価と文化祭での投票を行う。また、台湾への修学旅行で現地の高校生へ手渡している。なお、絵葉書作りは教科「情報」と連携している。

**村高ゼミ(2年)**

1学年での企業訪問から生まれた3つの課題「少子化・高齢化・地域活性化」をテーマに、7月に地元私立大学から講師を招いてゼミを開いてもらう。講義だけではなく質疑応答などを通して探究とどのようなものか指導していただく。その後、夏休みなども使い各グループが決めたテーマで探究活動を実施。11月に3つの課題への解決策を「市への提言」としてプレゼンテーションする。

以前より行われていた「市長とのふれあいトーク」もここに組み込み、探究テーマと関連することを市長に直接質問しようとして生徒に投げかけたところ、時間が足りないほど多くの質問が上がったという。

成果と課題

生徒に変化の兆し。  
各教科とも連携し進路実現へ

実際に探究活動を行う生徒と日々接している木山先生(2学年)は、「実体験を通して書くことにより、書けなかった生徒が書けるようになってきています。また、市長とのトークや出前授業などどんなことでも自分たちでテーマをもって参加すると姿勢がまったく違います」と生徒たちの主体性が育っていることを実感しているそう。また、田島先生(1学年)も、「発言などに積極性が生まれてきました。元気のいいクラスも出てきています。部活動にも積極性が生まれ、競技人口を増やすにはという課題を与えたところ、小学生とのスポーツ交流が生まれるなど、探究活動から波及した動きも出ています」と言う。

こういった動きについて「地域の課題の先に個人の課題があります。探究活動での気づきや成果をより具体的に自分の進路に結びつけていくことが今後の課題と言っているのは伊藤先生。まずは社会の課題を自分のことと関連づけ志望理由書を書くようにイヨボヤプランに修正を加えていきたいそうだ。そして、カリキュラムマネジメントを取り入れ、各教科とイヨボヤプランを結びつけ学力向上も図っていききたいという。『学校と地域との間にある壁が取り払われた気がします。今後ますます、見える化を進め、我々も変わらなければと考えています』



進路指導主事 伊藤 喬先生